

お好み焼き V S もんじゃ焼き

—熱き鉄板の戦い—



天見谷行人

お好み焼きVSもんじゃ焼き -熱き鉄板の戦い-

お好み焼きと、もんじゃ焼きが、ケンカをしているというので見に行った。既に周りには多くの人だかりが出来ていた。

「どうしたんですか？」僕は野次馬の一人に尋ねた。

「オウ、これは見物やでえ、粉もんと粉もんの大げんかや」とその男は応えた。この騒ぎが面白くてしょうがないと言う様子だった。

何でもその男の話しによると、同じ鉄板の上で、モダン焼きとチーズ明太子もんじゃ焼きが焼かれていたそうだ。



ところがモダン焼きに比べ、チーズ明太子もんじゃは、その水分比率が多い。そのため生地の一部が流れ出てしまった。それがモダン焼きのクレープ状の生地にし少し触れたのだ。

モダン焼きは、ムツとした表情を見せたが黙って焼かれていた。やがて生地の上に焼きソバが載せられた。その焼きソバが、円形の生地から少しはみ出たのである。

これがいけなかった。はみ出た焼きソバと、チーズ明太子もんじゃの水っぽい生地が、重なりあってしまったのだ。

「それでさっきから、ドえらい真剣勝負になってしもたんや」と男は言った。僕も彼の横に割り込んで鉄板の上を覗き込んだ。

鉄板上で焼かれているこの二人は、粉もん界のスターである。お互いにプライドがあり、一歩も譲る気配がない。しばらく睨み合いが続く。

鉄板の上で焼かれてゆく二人の粉もんは「ジジッ、ジュジュ」とお互いの間合いを計っている

。いつコテを使ったチャンバラが始まるのか？ 観客は固唾を飲んで見守っていた。やがてモダン焼きが、鋭い眼差しでこう言い放った。

「チーズ明太子もんじゃさん。私は、おいしく焼かれるためには多少の事は我慢します。そやけど、今回のアンタの振る舞いはなんですか！ せっかく私のこんがり焼けた生地も焼きソバも、アンタの水っぽいシャブシャブの生地のおかげで台無しです。これは我々、お好み焼き族に対する挑戦です。いや侮辱と言った方がいい。私はアンタを許さない。他のお好み焼き族の仲間の矜持にかけて、この勝負は勝ってみせる」

「そやそや、がんばれ！ モダン焼き！」

「関西の意地、見せたらんかい！」観客からは野次が飛び、拍手が起こった。しかしチーズ明太子もんじゃ焼きも黙ってはいない。

「モダン焼きさん、あなたはお好み焼き族の立派な武芸者だ。相手にとって不足はない。私は元々このように水っぽい体です。これは我々もんじゃ焼き族の宿命なのです。それをご承知で、あなたは私の隣で焼かれようとしていた。それはあなたの不注意に過ぎない。それを何ですか、こんな言いがかりを付けて来て。これは我々もんじゃ焼き族に対する挑戦状を叩き付けたのも同然。もんじゃ焼きの名誉とプライドに賭けて、この勝負、負けるわけにはいかないのです」

このもんじゃ焼きは、クールな眼付きで落ち着き払っている。もんじゃ焼き特有の小さなハガシをやや右斜め下手に構え、キャベツでつくった土手の腰つきはドッシリしており全くスキがない。誰が見ても、このもんじゃ焼きは只者ではない事が分る。

その時である。盤石に思われたもんじゃ焼きのキャベツの土手の一部から、例の水っぽい生地が少し漏れた。すかさずモダン焼きは、上段に振りかぶっていた大きなコテを振り下ろす。対するもんじゃ焼きは、小さなハガシを素早い動きで左斜め上方へ振り抜いた。

一カチン

火花が散った。二人は体勢を立て直し再びにらみ合った。

「おおーっ」観客からどよめきが起こる。こんな緊迫した真剣勝負は滅多に見られない。皆は鉄板の上の二人に拍手を送った。

「負けるな、もんじゃ焼き！」

「キャー、もんじゃさーん！カッコいい！」

観客の女性からも黄色い応援の声が飛ぶ。



鉄板は熱い。しかしそれ以上にモダン焼きとチーズ明太子もんじゃ焼きの戦いの熱気は熱かった。二人の生地はじりじりと焼かれてゆく。やがてモダン焼きのクレープ状の生地に、茶色い焦げ目が目立ってきた。

対するチーズ明太子もんじゃ焼きも、キャベツでつくった土手の内側（つまり水で溶いた小麦粉の池）が沸々と煮立って、丸い泡が出来たかと思うと、パチンと弾け飛んでいた。既に水分が少なくなって来ていたのだ。両者今が食べごろである。これ以上焼かれてしまうと焦げる心配が出て来た。そろそろ決着をつける時が来たようだ。

先手を切ったのは、チーズ明太子もんじゃ焼きだった。ハガシを構えておいて飛びかかろうとした次の瞬間「これでも喰らえ」とばかりに、モダン焼きに対して小さく刻んだ餅を投げたのである。モダン焼きは突然の飛び道具に驚いた。しかしそこはさすがに百戦錬磨の武芸者、モダン焼きである。素早く大きなコテを使って自らをひっくり返し、位置をずらして、もんじゃ焼きからの餅攻撃を巧みにかわした。

「いいぞ！ モダン焼き！」

「あのコテさばきはやっぱり関西人や！」と観客からは、やんやの喝采である。更にモダン焼きは、ひっくり返った次の瞬間もんじゃ焼きに向かって、パッと青のりと鰹節を投げつけたのである。対するもんじゃ焼きはその宿命から、ひっくり返る事が出来ない。そこで小さなハガシを楯の代わりに使い、飛んでくる青のりと鰹節を、サッサッサッと手際よく防いだ。投げつけられた青のりと鰹節は、実にそのほとんどが、鉄板の上に叩き落されてしまった。

「なんと言う技だ！」観客はどよめいた。しかしもんじゃ焼きの技はそれだけではなかった。チーズ明太子もんじゃ焼きは、ハガシで防戦しながらも、目にも留まらぬ早業でモダン焼き目掛

けて、あるものを投げつけたのである。

鉄板の上は、まるで機関銃の弾のように、粉もんのトッピングが飛び交う、さながら空中戦の様相を呈していた。チーズ明太子もんじゃ焼きが投げたのは、ベイビースターラーメンであった。モダン焼きは今、焼きそば面が鉄板に接している。やや焦げたクレープ状の生地が上になっていた。ちょうどそれが装甲板の代わりとなり、バラバラと爆弾のように降ってくる、ベイビースターラーメンを物の見事に跳ね返してしまった。

お互い飛び道具まで出しての決戦は、いつ終わるとも知れなかった。これ以上鉄板の上で焼かれては、二人とも只の焦げた小麦粉になってしまう。その時だった。

「ころん、ころん、ころん」鉄板の上に転がり出てくるものがあった。

「二人ともお止めなさい、見苦しい。こんな無益な戦いはお止めなさい」

観客は何が起きたのか？とその丸い物体に注目した。仲裁に入ったのはタコ焼きであった。

「何だ！ タコ焼き風情が！ お前の出る幕ではない！」チーズ明太子もんじゃ焼きは怒鳴った。

「そうや、これは粉もんの決着をつける大事な戦や。タコ焼きは黙っとれ！」とモダン焼きも、焼きソバの部分をカリカリに焦がしながら怒っている。



そこへもうひとつ丸い物体がコロコロと出て来た。「玉子焼き」とも呼ばれる「明石焼」であった。

「二人とも控えい！ 控えい！ ええーい、そこのモダン焼き、並びにチーズ明太子もんじゃ焼き、控えろ、頭が高い！」やがて、玉子焼きとタコ焼きは、コロコロと二人揃って鉄板の奥の方へ行き、頭らしきところを下げ、膝らしきところを鉄板につけて、かしこまった。

やがて一番奥の鉄板から巻物の様なものが現れた。よく見ると、それはこんがり焼いたクレープを、くるくると巻物のように巻いたものだった。タコ焼きと玉子焼きが叫んだ。

「ええい皆の者、頭が高い！ 控えおろう」

モダン焼きとチーズ明太子もんじゃ焼きは、ハッとした様子で慌ててお互い持っていた、コテとハガシを収め膝を付き、サッと頭を下げた。

チーズ明太子もんじゃ焼きが、頭を下げながら、その巻物に挨拶した。

「これはお見苦しいところをお見せ致しました。申し訳ございません」

モダン焼きも謝った。

「誠に申し訳ありません。まさか、あなた様が、こんな場所にまでいらして下さるとは…… わたくし、一度はお目にかかりたいと、かねがね思っておりましたが、まさか、こんな場面で」とモダン焼きは悔しさと恥ずかしさで涙を滲ませた。観客は囁きあった。

「ありゃ、誰なんだい？」

「さあ？ 粉もんでは見かけまへんなあ」

すると玉子焼きが叫んだ。

「ええい、そこの観客ども、頭が高い！ 控えい！」続けてタコ焼きが口上を述べた。

「ここにおわします方をどなたと心得る！ かの千利休様のお手による、貴い粉もん界の御先祖、『麩の焼き様』にあらせられるぞ！ 一同控えい！」

観客も僕もあわてて神妙な面持ちで座り頭を下げた。やがて『麩の焼き様』が静かにやんわりと口を開いた。

「タコさん、玉さん、よう争いを止めてくれましたなあ。お礼を言います。さてチーズ明太子もんじゃさん、そしてモダン焼きさん、どちらも立派な、粉もん界の武芸者ですね」

もんじゃ焼きも、モダン焼きも大変恐縮した様子だった。

「二人ともどうやら、千利休はんがおつくりになったわたし、麩の焼きの顔に免じて、もう粉もん同士の争いは、せえへんと誓うてほしいのや」枯れた焼きシワのある優しい笑顔は場を和ませた。

二人は握手した。

「さあさあ、皆さんも、どうぞ。そない堅苦しゅうせんと、この二人を食べてみて下さいね」麩の焼き様の言葉に我々観客も、それぞれ、もんじゃ焼きとモダン焼きを食べ始めた。

「老師、ではお早く」タコ焼きが促した。

「ああそやったなあ。ピッツァ大使とワッフル公爵がお待ちやったなあ。久しぶりに逢うのは楽しみや。ほな皆さんさよなら」（了）

あとがき及び謝辞

久しぶりに短編小説が書けた。

今回私が目指したのは、出来るだけバカバカしいお話であり、読者の笑いを誘うものを目指した。

それは、人を笑わせる事は、とても貴い行為ではないか？ と最近思うようになったからだ。このところ意識して「落語」を聞くようになったが、人を笑わせる職業というのは正に「聖職者」なのではないかと思える。

笑いは健全な精神を保つための栄養素なのだろう。

私自身その栄養素が足りない状態が長く続いた。

前作「人肉バーガー」を書いている最中から、自分の精神のバランスが崩れてゆくのが分った。

「人肉バーガー」という小説は、私自信が知らぬ間にパンドラの箱を開けてしまったような、実にタチの悪い小説であった。

更にまずい事に、私はこの小説を、こともあろうに、美しく描いてしまったのだ。

私はこの小説が持つグロテスクな一面を、描こうと思えば描けたはずである。

今さら悔やまれるが、キチンと小説と向きあい、そう言う場面を描いておくべきだった。

それを私は描かなかった。

なぜならそれは、私自身の人間としての醜さをさらけ出すことであり、動物的な恥部をさらけ出す事になるからだ。

私はそれを恐れた。

そして表面上は美しく描く事によって、自分に嘘をつき、誤摩化して、逃げてしまったのだ。

結果的にこの小説は作品として昇華しなかったために、私は大きなツケを払う事になった。この作品が持つ「自意識の毒」は確実に私の中で暴れ始めていたのだ。

やがて「人肉バーガー」という作品は、作者である私自身を攻撃し始めた。言ってみれば、それはまるで「フグ」が自分の毒にあたって、もがき苦しんでいる様な有様だった。

一時は立ち上がれぬ程のうつ状態が続き、寝込んでしまった。

そんな私を支えてくれたのは、ネット上で出会い、交流させて頂いたアマチュア作家の皆さんである。

特にGrasshouse氏からは、小説が持つ悪影響に対する解毒剤となる、実に丁寧な処方箋を書いて頂いた。

文章に限らず表現者を志す者の悪戦苦闘、それこそ七転八倒ぶりは、日常生活を送る一般常識人からは、全くと言っていい程理解されない。

その苦しみが真に理解出来るのは、同じ志を持った表現者だけであろう。

今回再びペンを持てるだけの精神状態に回復する事が出来たのも、ひとえにGrasshouse氏を始めとする、ネット上の作家仲間の皆さんの温かいご理解とご支援の賜物である。

ここに深くお礼を申し上げ、感謝の意を表したいと思う。

お好み焼き V S もんじゃ焼き -熱き鉄板の戦い-

<http://p.booklog.jp/book/62771>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62771>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62771>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ